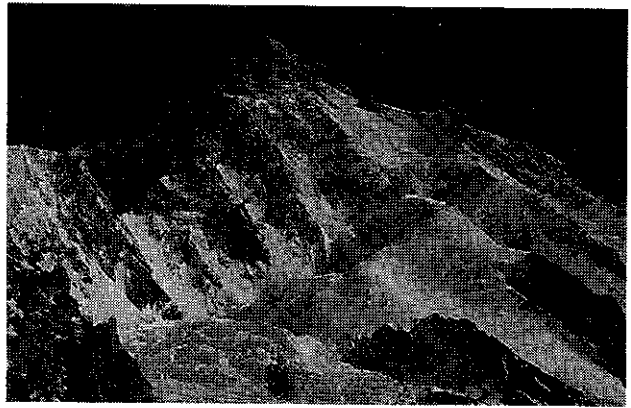


日本山岳会青年部K2登山隊報告

山 本 篤

K2は1954年イタリア隊により初登頂が成されたが、その後も多くの登山隊が訪れ、栄光の陰に数々の悲劇のドラマが急峻な山容に刻まれた。これが「非情の山」といわれるゆえんである。バルトロ氷河最奥にそびえる世界第2の高峰は、今日に至っても圧倒的な高度と存在感で我々を引きつけてやまない。このK2に行こうと決めたのは、1995年2月、JACマカルー隊出発も間近に迫った頃であった。

当時マカルーに行くためやむなく退職し、忙しいながらもももんとした日々を送っていたが、そのうちプラス思考でいえば、山に行きやすくなったと思えるようになった。そこで考えたのが、マカルーの次は、連れていってもらわずに、自分で隊を組織してみようということだった。そうすれば、必然的に大学山岳部出身者中心の隊になるであろう

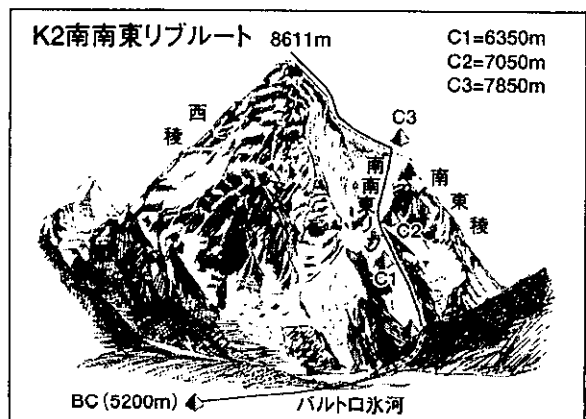


BCよりK2全容

し、その力を結集し難しい目標にチャレンジすることで、次代を担う若手の育成、さらには、斜陽と言われて久しい大学山岳部の底力を示し得ると思った。

登山隊の編成は、まず私と同様に、大学山岳部に強い思い入れのある松原尚之に加わってもらい、公募ではなく2人が良いと思う者の1本釣りから始まった。さらに信頼できる各大学の先輩から優秀な若手を紹介してもらうことで、最終的に10大学19名、平均年齢27才の隊編成となった。これについては、当初最大でも15名と考えていたので、少々多いとも思ったが、計画に賛同して集ったという意味ではうれしい誤算があった。

ルートに関しては、最初最も多く登られている南東稜を予定したが、過去の隊の残置物の追従となることや、他隊との競合によるトラブル、自分達のペースで力を出し切れるルートをと考え、新鮮味の点からも比較的新しいルートである南南東リブに目標を定めた。



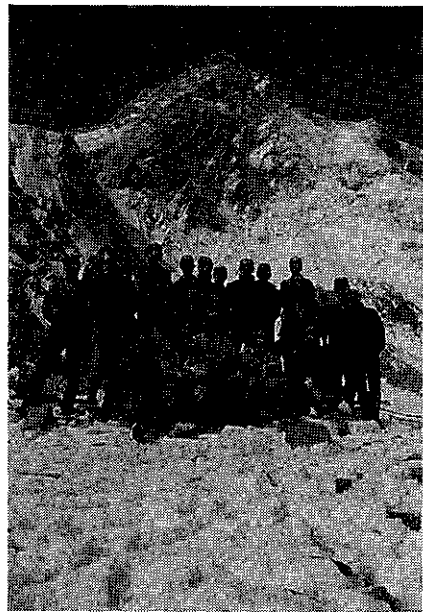
1. 登山記録

このルートは、94年スペインバスク隊により完登されており、7,800m付近で南東稜と合流する。下部が急峻で困難が予想されるが、ベースキャンプからその全容を望むことができるのが大きな利点である。

登山方法は、若く経験の少ないメンバーが多いため、オーソドックスな極地法を採用し、最終ステージでは酸素も使用することにした。ただし高所ポーターに頼ることなく、ルート工作、荷上げ等全て自力で行うこととした。



キャラバン（コンコルディア付近）



BCに集結した隊員

今年のカラコルムは、例年になく天候が不順で、BC入り直前より全般にわたり悪天候に苦しめられる登山であった。また競合を避ける意味でルート変更したが、我々より1週間前に、ロドリゴ・ホルダン隊長率いるチリ隊が南南東リブに取り付いていた。チリ隊とは、どちらが先行してもフィックスロープは、それぞれ独自に固定することとし、後に大きな問題となったテントサイトについての打ち合わせや、落石時の掛け声などをBC入りと同時に確認した。チリ隊も我々の一次隊登頂の翌日、4名が頂上に達したが、大変友好的で最後まで何のトラブルもなく気持ち良く行動できたのは幸いであった。

実際の登山活動は、困難視していたルート下部も技術的には特に難しい箇所もなく、天候が良くなれば概ね順調に進んだ。また荷上げの方も、もともと体力だけには自信のある隊員たちなので、こちらは余裕があるほどであった。問題はテント場がないことで、最初これだけ大きな山だから何とかなるだろうと考えていたが、どうにもならなかった。C1(6,400m)、C2(7,050m)とも予定高度よりずっと上に、ようやく猫の額ほどの場所を見つけて、ベースキャンプ建設用に持参した工事用のツ

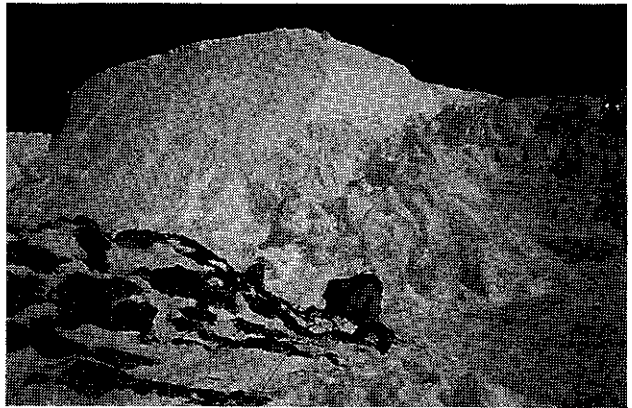
1. 登山記録

ルハンを荷上げて設営した。岩を砕き氷を削っても、まだテントの端は空中に突き出ているといった状態であった。

しかし反面、悪天候により登山の進行が遅く、その度にベースキャンプで十分な休養が取れたこと、また予定していた4つの前進キャンプが3つになり、荷上げの負担が軽減されたことは、良い方向に作用した。C3（予定では7,400m）で睡眠用に使うはずだった酸素をC2（7,050m）で、翌日上部行動する者のみ、睡眠時使用したことは大きなポイントであった。1人の不調者も出ず、8,000m近いアタックキャンプ（7,850m）に、18人の登攀隊員中16人が到達したことは大きな成果であった。

7月末に、アタックに必要なすべての物質がアタックキャンプに集結し、休養のために全員がベースキャンプに下った。2日間の休養の後、予定していた9名から12名にアタッカーを増やし、順次ベースキャンプを出発する予定であった。しかし8月3日からまたしても悪天候となり、3度目の10日を越える停滞を余儀なくされた。すでに登山期間は50日を越え、上部に大量の新雪が積もり天候の周期も短くなり、秋が近づいてきたことがはっきりと感じられた。そして長い停滞とストレスにより一部の隊員の緊張感の持続が困難となり、リーダー間の確執も表面化し、もはやこれまでかと思われたが、登山続行の決断を支えたのは、隊員たちの頂上への強い情熱であった。

1つのミスも犯さないという強い決意のもと、8月10日1次隊6名、11日2次隊6名がベースキャンプを出発した。短くなった天候の周期に対応するため、双方ともにC2へダイレクトに入り、1次隊は11日アタックキャンプに入った。そして12日午前11時10分、深いラッセルを克服し、まず松原、谷川、村田が頂上に到達し、残りの3名も午後12時50分までに登頂した。さらに1日おいた14日、午



ボトルネックの登攀

前7時30分から11時20分の間に、山本、竹内、稲葉、高橋、佐野、長久保の順に計6名が頂上に立ち、K2登山史上初の2ヶ所登頂、(従来は1986年イタリア隊の8名)最年少登頂記録(高橋の22才)を果たし、無事下山した。1次隊、2次隊とも、アタック時は天候に恵まれたが、15日より悪天の周期に入り、ついにキャラバン終了の24日まで好天は訪れず、今シーズン恐らく最後のチャンスをつかみ得たことは、本当に幸運であった。

最後に登山を振り返って、小さな事故、けが、病気、凍傷もなく、全員が元気で帰国できたことは、登頂成功もさることながら誇り得る成果であると思う。若い隊員たちも自己管理が徹底でき、大学山岳部で養った基礎的な体力、技術が発揮できた。また参加したほとんどの隊員はそれぞれの持てる力

1. 登山記録

を充分出し、よくやってくれたと思う。しかしながら、私自身が最も伝えたかったもの、すなわちヒマラヤにおける危険認識、多くの方々に支援してもらってヒマラヤ登山を行うことの意味はあまり理解されなかったようである。もちろんこれはひとえに私自身の力不足によるものであるが、実に残念である。さらに言えば、今回本当に登頂するにふさわしい力を備えていたのはごく少数であり、他は



頂上（1次隊、松原(左)・谷川)

条件に恵まれた中他人のトレースを追ったにすぎない。このへんを理解していないと、今後の登山で必ずや「こんなはずではなかった」というような壁にぶつかるであろう。また登頂し得なかった者は、登ったものに対し何が欠けていたのかを謙虚に振り返る気持ちがなければ、これ以上の発展は望めない。いずれにせよ、今回の登山の真価は、参加した全員の今後に問われることを認識し、私自身登山を続けていこうと思う。

日本山岳会青年部K2登山隊1996 行動概要

- 5月20日 ネパール先発隊（松原、長久保、高橋）、成田発
- 24日 パキスタン先発隊（谷川、村田、椎名、吉田）、成田発
- 31日 パキスタン本隊（山本以下12名）、成田発
- 6月4日 飛行機でスカルドへ移動
- 7日 ジープでトンガールへ
- 8日 キャラバン開始。コラホンへ
- 16日 K2 ベースキャンプ（以下BC、5,200m）着
- 17日 南南東リブ取りつきまで偵察、隊荷整理
- 18日～21日 悪天により停滞
- 22日 実質的な登山開始
- 24日 6,050mデポ地着
- 27日 C1（6,400m）到達
- 7月4日 C1建設
- 9日 C2（7,050m）到達
- 11日 C2建設
- 28日 C3（7,850m・K2の南東稜の肩）到達

1. 登山記録

- 8月11日 C3建設
12日 第一次アタック隊（松原，谷川，赤坂，村田，椎名，吉田）登頂
14日 第二次アタック隊（山本，稲葉，長久保，竹内，佐野，高橋）登頂
15日 全員BCに下山
18日 BC撤収，帰路キャラバン開始。ゴレへ
22日 アスコーレ着
24日 スカルド着
27日 イスラマバード着
9月1日 全員，成田帰国

登山隊の構成

隊長	山本 篤 (33)	明大OB
副隊長	松原 尚之 (31)	法大OB
登攀隊長	谷川 太郎 (29)	東農大OB
登攀リーダー	稲葉 英樹 (32)	早大OB
輸送梱包	松本 伸夫 (31)	法大OB
気象	赤坂 謙三 (28)	千葉大OB
環境衛生	亀山 哲 (28)	千葉大OB
食糧燃料	岡本 憲 (27)	中大OB
輸送梱包	長久保浩司 (27)	東農大OB
記録写真	村田 文祥 (26)	都立大OB
食糧燃料	椎名 厚史 (26)	早大OB
装備	安島 伸一 (26)	立正大OB
輸送梱包	吉田 裕一 (26)	東農大OB
酸素	竹内 洋岳 (25)	立正大OB
無線	朱宮 丈晴 (24)	千葉大OB
食糧燃料	佐野 崇 (23)	同大OB
装備	高橋 和弘 (22)	明大OB
装備	豊島 匡明 (22)	明大OB
BCマネージャー	高見喜久雄 (56)	大工大OB